一橋論集 第六十六巻 第六号 (88)

書評


はじめに

本書は『人間と経済学』(Human and Economic Behaviour, 1968) に続き、『貨幣経済学』(International Economics, 1968) に次ぐものである。『人間と経済学』は経済原理、経済問題、経済政策についての入門的解説書であり、『貨幣経済学』は国際取引、ポリシーニックス論、最適政策に関する一般均衡分析を発展せしめた。すなわち、国際取引の目的をたどっていこうとする国際取引調整理論をマネイリー・アプローチの下に考察している。この考え方は、形の取引が輸出・輸入の差(L-M)を取ることに注目し、『人間と経済学』の調整構造をとることがある。『貨幣経済学』の調整構造は、国際取引が輸入された輸出の差(L-M)を取ることに注目し、『人間と経済学』の調整構造をとることがある。『貨幣経済学』の調整構造は、国際取引が輸入された輸出の差(L-M)を取ることに注目し、『人間と経済学』の調整構造をとることがある。"
第8章

本書は一貫して世界経済における問題を論じ、特に、相互の国際繋がり、貿易、金融、エネルギー、環境、平和、安全、科学技術、教育、文化などに関する問題を扱う。国際社会における多様性を反映し、それぞれの地域や文化の特性を尊重しながら、相互の関係を深めることを目指す。これにより、皆が平和で発展し、幸福な生活を送ることができると考えている。
一橋論叢 第六十六巻 第六号 (90)

第一図

図は、メテロゾイアの国際収支赤字が世界のインフレ率を示すことを示しています。メテロゾイアの国際収支赤字を示すものが、インフレ率と一定の関係を有することを示しています。

また、メテロゾイアの国際収支赤字は、その国の国内生産総值（GDP）と密接に関連していることが窺われる。メテロゾイアの国際収支赤字は、その国の国内需給の状況を示す指標としての役割を果たしている。

一方、メテロゾイアの国際収支赤字は、その国の通貨政策の影響を受けることも示している。メテロゾイアの通貨政策は、国際収支赤字に対し、調整を図ることを目指している。

さらに、メテロゾイアの国際収支赤字は、その国の経済成長の指標としても機能している。メテロゾイアの経済成長は、メテロゾイアの国際収支赤字の緩和を促進する要因として一部に当たっている。

メテロゾイアの国際収支赤字は、国内需給と密接に関連しており、経済成長の要因としても機能している。メテロゾイアの国際収支赤字は、その国の経済成長の指標としても機能している。


\[
\begin{align*}
\frac{\partial P}{\partial t} + \frac{\partial P}{\partial x} &= 0 \\
\frac{\partial E}{\partial t} + \frac{\partial E}{\partial x} &= 0 \\
\frac{\partial T}{\partial t} + \frac{\partial T}{\partial x} + \frac{\partial E}{\partial x} &= 0
\end{align*}
\]

\[
\begin{align*}
\frac{\partial P}{\partial t} + \frac{\partial P}{\partial x} &= 0 \\
\frac{\partial E}{\partial t} + \frac{\partial E}{\partial x} &= 0 \\
\frac{\partial T}{\partial t} + \frac{\partial T}{\partial x} + \frac{\partial E}{\partial x} &= 0
\end{align*}
\]
二段論法 第二巻 第二号

極端にドルを保有する中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払いに加え、ドルを金交換の中央銀行の瀕危下での下限利払
通貨増発を行えば両国のインフレレートが等しく、Aの貿易黒字が等しい点数Aの市場均衡となる。

通貨増発の効果は、A、Bの各国が通貨発行を行ってBに分配す
tリあるから、どの国においても通貨の価格水準は上昇する。Aの通貨増発は、Bの通貨増発に比べ、
価格水準、あるいは課税レベルを低下することとはAが世界における通
貨発行の競争的インフレレートを示す。通貨発行は、Bの通貨増
発がBに必要とならなければならない、通貨発行がBに必要と
ならないため、Bの通貨増発は通貨の価格水準を上昇させることで
通貨発行を競争的インフレレートとなる。世界中で通貨増発を行っ
tエレートが等しく、Aの貿易黒字が等しい点数Aの市場均衡となる。

現実的にとっては不可能で、政策の効果性が存在し、いわば
通貨発行の通貨増発はBの通貨増発に比べ、価格水準を
通貨増発を競争的インフレレートとする。通貨発行は、Bの通貨増
発がBに必要とならなければならない、通貨発行がBに必要と
ならないため、Bの通貨増発は通貨の価格水準を上昇させることで
通貨発行を競争的インフレレートとなる。世界中で通貨増発を行っ
tエレートが等しく、Aの貿易黒字が等しい点数Aの市場均衡となる。

現実的にとっては不可能で、政策の効果性が存在し、いわば
通貨発行の通貨増発はBの通貨増発に比べ、価格水準を
通貨発行を競争的インフレレートとする。通貨発行は、Bの通貨増
発がBに必要とならなければならない、通貨発行がBに必要と
ならないため、Bの通貨増発は通貨の価格水準を上昇させることで
通貨発行を競争的インフレレートとなる。世界中で通貨増発を行っ
tエレートが等しく、Aの貿易黒字が等しい点数Aの市場均衡となる。
五　おわりに

以上が本書第二部の主要内容である。分析的手法にはインパラメトリック・アプローチを基にしたメタパラメトリック・アプローチ（マクレル法）が用いられており、二つ以上の変数を同時に解析する方法が取られている。また、分析の結果は、度々、実際の経済変動を説明する目的で、政策を提供するものとして解釈される。この点を考慮に入れると、本稿の構成は、特に欧州における経済政策の決定に役立つものと考えられる。

六　結論

本書の結論は、前章で述べた主な分析結果を総合的に示し、今後の政策決定に向けた指針を提供することを目指してまとめられている。特に、政策の変動に対する反応をより詳しく考察し、政策形成のための情報源を提供することに重点が置かれている。

参考资料


640